弔辞

林秀行さん、米寿を記念する個展を間近に控え、逝ってしまいました。

寝ついて身体が動かせなくなる直前まで、仕事に意欲を燃やしていた林さん。

あなたの人生は、まさに「陶磁に生きた」人生だった。「陶磁に生きた」というだけでは足りない、「陶磁と共に呼吸していた」というべきか。

林さんが、八木一夫さんや鈴木治さんが立ち上げた走泥社の若いメンバーとして活躍し始めた頃、僕たちは知り合った。京都芸術短期大学の創立スタッフとして、林さんは陶芸コース、僕は美学美術史コースの教員だった。

そして、忘れてはいけないもう一人の仲間、染織コースの主任を勤めていた森口邦彦さん。

三人はそれぞれコースが違ったので、教授会でしか顔を合わさなかったはずだけれど、多分その教授会での発言などを通してだと思う、現代における芸術のあり方、美術教育というのはどうあるべきか、直観的に共鳴し合うところを見つけ合ったようだ。

森口さんの「森」、林さんの「林」、木下の「木」で六本の「木」。「六本木会」という名前を考えだしたのは森口さんのように憶えている。

以来、われわれは、祇園のつる居に集まって、粋な酒席には似合わない議論を熱心に続けたものだった。三人の考えをまとめた「工芸論」を芸短の機関誌に発表したり、三十代の意気盛んな頃。あの時の議論は、三人のそれからの人生にすばらしい機(はず)みを与えてくれたと思う。

三人の友情は、森口さんが芸短教授を辞し、僕が横浜へ行ってしまってからも途絶えることなく続いてきた。

そのあと、林さんも芸短教授の職を投げ打ち、みずから「窯(かま)ぐれもどき」と称して、10 年近く、日本各地の窯を訪れ、宿と片隅の仕事場を借り、制作する生活を始めた。これも、六本木会の議論の体験が林さんを励ましていたからだと、僕は自惚れている。

林さんは 10 年後、再び京都芸短の教授に返り咲き、たくさんの学生さんを育てた。

芸短に勤める前に成安女子短期大学でも教えていた林さんは、作家であると同時に「陶芸」の先生だった。昔の卒業生がいまも林さんを慕って訪ねて来るという。きっとその教えぶりは、それ自体が「土を捏ねる」ような愛の籠った教え方だったのだろうと僕は想像する。

林さんの教え子たちは、みんな林さんの作品だ。

東京周辺に居る卒業生が年に一度開く展覧会に必ず招かれ、その時には、横浜の僕のところへも電話をくれるのだった。行きつけのカフェテラスのある欅(けやき)の木の下のテーブルで、昼ごはんを食べ、歓談したものだ。歓談といっても、孫の話だとかそういうのではなく、仕事の話、かっこよく言えば芸術論をたたかわすのだった。

去年の夏に会ったのが最後になった。癌が再発したことを言い難(に)くそうに伝えてくれた。それでも、次の米寿記念の個展とその翌年の東京での個展の計画を語り、そこに文章を寄せることを約束させられた。そしてまた芸術論議に戻るのだった。あの時は、光琳のことで話が沸騰したものだった。

決して自分の仕事に驕らない人だった。

つねに自分の為したことへの足りないところに目を配り、次の仕事へ取り組んだ。

安定した職と地位を捨てて「窯ぐれもどき」の旅を始めるなぞ、誰にでも出来ることではない。そんなところに、林秀行という作家の自分の仕事(メチエ)に対する厳しさを見る思いがする。

厳しさと同時に優しさを忘れない人だった。

どこか、飄々として自分の仕事を見ていた。

その作品を一目見れば判るように、世界をユーモアで見つめるまなざしを大切にしていた。干支のオブジェは何十年も欠かさず続けて来た。そういうことを怠らない人だった。

オブジェ作品だけでなく、土を捏(こ)ねる限り、皿や茶碗も作れなきゃあかん、というのが持論だった。僕の家(うち)の日々の食卓は、林秀行作の食器で成立している。

この２月誕生した最初の曾孫(ひまご)のために、すでに病床生活に入っていたが、自宅療養になって家へ戻って来るとすぐ起き出して、土と向かった。病床に寝ついていた時と顔つきががらりと変わって兜(かぶと)のオブジェを完成させた。これが、林さんの最後の仕事になった。

ほんとうに、土と共に生き、土と語り、土と呼吸していた、真の「陶磁の人」だった。

とうとう遠い国へ行ってしまうのだが、そこでも土と語らい、土に耳を傾ける毎日を送っていくことだろう。

僕も遠からずそっちへ行くから、またいろんな議論をしようね、林さん。

しばしのお別れだ。ひとまず、さようなら！

２０２４年4月2日　　木下長宏